

## 中国史いろいろ 鄭成功と日本と台湾

戸田奈緒子

江戸時代、上方文化を象徴する作家、近松門左衛門による人形浄瑠璃に、後に歌舞伎化され浮世草子にもなった『国姓爺(国姓爺)合戦』があります。明末清初に台湾を拠点とし、清に対して抵抗運動を続けた鄭成功をモデルにした和藤内(和でも唐でもないという駄洒落)を主人公に据え、史実とは大幅に異なる物語ですが、人気となった理由の一つに、彼が日本人の血を引いていたことも大きいでしょう。国姓爺とは、鄭成功が南明の隆武帝から、国姓である朱を賜ったことより来た呼び名です。中国では同姓の人間は同じ一族とみなされるため(なので同姓同士では結婚できません)、皇帝の姓を名乗ることを許されるというのはこれ以上ない栄誉でした。また、爺、というのは老年の男性を指すのではなく、目上の人に対する敬称です。例えば「旦那様」なら「老爺」、「若様」なら「少爺」、等という風に使われます。

鄭成功は日本名を福松、元の諱を森といい、福建出身の海商である鄭芝龍を父、平戸藩士田川七左衛門の娘マツを母に、肥前国平戸島(現在の長崎県平戸市)で寛永元年・天啓4年(1624年)に生まれました。海商とは、単なる貿易商人ではなく武装化した海賊の一面もありました(=後期倭寇)。カトリックの洗礼を受け、幾つもの言語に堪能で、最大の勢力を有する海商グループを率いていた鄭芝龍は、明からの招安を受けたことにより高位の官僚でもありました。七歳で単身、福建に渡った鄭成功も、十五歳で院試(最高学府である国子監の入試)に合格して生員(科挙の第一関門たる本試験である郷試の受験資格を得た者)となっています。しかも成績が優秀であったため、役所から食料が給与される「廩膳生」の一人でした。南京国子監に進んだ後には、文壇の重鎮で江左三大家の銭謙益に師事しました。

崇禎17年(1644年)に、「闖王」李自成一の乱によって首都北京が陥落、崇禎帝は自殺し明が滅びます。李自成は国号を順としたものの、ドルゴン親王と呉三桂率いる、満州族の清と明遺臣の連合軍に敗れ、北京は以降、清の支配下に置かれることとなります。

明滅亡後、鄭芝龍は唐王朱聿鍵を擁立し、南下してくる清に対抗します。これが隆武帝で

す。しかし、清の勢力は非常に強力で、隆武帝は福建で捕らわれた後に自害します。抗戦派の成功は泣いて制止したものの、機を見るに敏感な商人である芝龍は、明に先無し、と清に投降してしまいました。

父と袂を分かった成功は、広東で即位した永明王朱由榔(永曆帝)を奉じ、反清の姿勢を明確にします。最初の拠点である南澳から廈門島を占拠、鄭一族の勢力を掌握した後、北伐の準備を始めました。

鄭成功は、日本乞師とって江戸幕府(将軍徳川家光)に二度、一族の鄭彩を派遣して援軍を要請したこともあります。その時の使者の一人が、後に日本に亡命し水戸学の基礎を築いた朱舜水です。

父からの清への降伏の勧めを拒否し、成功は清朝と一進一退の戦いを繰り返しながら、永曆12年(清順治15年・1658年)に遂に北伐の軍を興します。羊山海域で嵐に遭い多数の船を失ったため、一年後に軍を立て直し、南京にまで迫るも大敗に終わりました。大陸の領土を失ってしまった鄭成功は再起を図るため、二年後、当時台湾を統治していたオランダ東インド会社をゼーランディア城(現在の台南市)攻防戦にて駆逐し、鄭氏政權(東寧王朝)を樹立します。

史上初めて漢民族による台湾統治を行い、今日までに至る開発の基礎を築いた鄭氏政權は、成功が若くして亡くなった後、三代で滅びますが、最後まで明の元号である永曆を使い続け、忠義を貫きました。

敵対した清康熙帝からさえも忠臣と称された鄭成功は、中国の民族的英雄であり、特に台湾では開祖として現在も尊敬され、精神的支柱となっています。そして、その名は今も国立成功大学や、中華民国海軍の成功級フリゲート一番艦等に残されているのです。また、平戸には鄭成功分霊廟や記念館があり、日本でも極めて高く評価されています。

## ■参考文献

奈良修一著『鄭成功：南海を支配した一族』(山川出版社)

とだ なおこ(司書・管理運営課)